

『富岡と松田』

〈1日目-2〉

〈ワタシ、長崎駅前の陸橋で秋ちゃんと落ち合う。

ワタシは花柄のシャツに麦わら帽子、ショートパンツにレギンス、ジョギングシューズ。

秋ちゃんは黒い長袖ジャケットにカーキ色のズボン、黒のスニーカー〉

秋子「やあ」

ワタシ「ちわーっす」

秋子「・・・」

ワタシ「何？」

秋子「いやあ、すごいカッコだね」

ワタシ「そう？虫取り少女をイメージしてみました」

秋子「ちがうだろ」

ワタシ「ヘンかね？いつもこんなやろ」

秋子「派手」

ワタシ「まあね。ヘンか」

秋子「いや、別に。ただ派手やなーって」

ワタシ「秋ちゃんこそ暑そう」

秋子「暑いよ」

ワタシ「脱げば」

秋子「嫌だ」

ワタシ「とりあえず、暑いんで、行きませんか」

秋子「ああそうだね」

ワタシ「どっち？あ、路面電車の乗れる券もらったん、高速バス往復買ったら。路面電車乗る？」

秋子「乗っても行けるし歩いても行ける」

ワタシ「乗ろう、せっかくタダ券あるし。4枚も使わんけん1枚あげる」

秋子「あぁうん。ありがと」

(ワタシ・秋子、路面電車に乗り込む)

〈1日目-4〉

〈ワタシ、美術館で「アントニオロペス展」を見終わる。出口に秋子が待っている〉

秋子「どうやった」

ワタシ「マルメロの実の絵があったやん」

秋子「うん」

ワタシ「あれって食べれるんかねえ」

秋子「さあ」

ワタシ「食べれるんやったらさ、どんな味なんやろうって思った」

秋子「・・・」

ワタシ「・・・的外れな感想でごめん」

秋子「別に」

ワタシ「あと、冷蔵庫の絵が好きやった」

秋子「ああ、うん」

〈1日目-5〉

〈ワタシ・秋子、美術館を出る〉

秋子「今日どうするん」

ワタシ「ネカフェに泊まる」

秋子「そっか」

ワタシ「うん。秋ちゃん明日仕事」

秋子「うん、まあ」

ワタシ「もうちょっと話せる？」

秋子「別に大丈夫よ」

（ワタシ・秋子、炎天下を歩いて行く）

〈1日目-6〉

〈ワタシ・秋子、浜の町アーケードのドトールで喋っている〉

ワタシ「そういえばテンちゃんは？」

秋子「ああ、8月退院予定やけど伸びるかもって」

ワタシ「ああ・・・」

秋子「体重は増えたらしいけど。ちゃんにご飯食べれるようになって来たらしいし」

ワタシ「体重だけ増えれば良いってもんやなかる。根本的な原因をさ、テンちゃんの場合は多

分、親とかとの関係やろ、それをなんとかせんと、退院してもさ」

秋子「それは医者じゃどうにも出来んやろ」

ワタシ「だから・・・カウンセリングとか？わからんけどさ、あくまでワタシの素人考えやけん。でも、うーん。結局関係性の問題やろ」

秋子「関係性ね」

ワタシ「うん。そうやと思う。甘えたい時に甘えられんかったっていうか、嫌いだけど好きみたいな、許したいけど怒ってるみたいな、それで混乱してる感じ？いっぺんちゃんと話し合はんとき、言いたい事言わんとどうしようもならんやろ。家出れば良いけど、それもすぐはムリやろうし。仕事できんやん。もういっそ寺にでも入るとかさ」

秋子「寺ね」

ワタシ「極端な話ね」

秋子「全然違うけど、職場の人もなんか自分の息子の就職がうまく行かんで最悪寺に入れるか、とか言ってた」

ワタシ「へえ」

秋子「なんか、勉強はできるけど、就活で自分の意見をバーって言っちゃって、落ちるんやつて。で、なんか病気なんじゃないかって気づいたらしい」

ワタシ「ああ、なるほどね」

秋子「寺って、お金かからんのかね」

ワタシ「さあ・・・やっぱ食費とか納めないかんのやない」

秋子「ふーん」

ワタシ「入らないにしても、内観とか、良いつて、知り合いが言ってた。親の事とか考えたりしながら瞑想するんだって」

秋子「へえ」

ワタシ「どっちにしろ本人次第なんやけどさ。本人がかわるか、周りの環境が大きく変わるか。ここでウチらがどうこう言っても、結局本人次第やろ」

秋子「意外と真剣に考えてるんや」

ワタシ「真剣、かなあ。でも結局どうしようも出来んやん。例えばテンちゃんが実家出れるように、一緒に住んであげるとか、精神的に責任持てんし、金銭的にも無理やし。言うのはいくらでも言えるけど、実際なんにもしてやれんし、本人次第やん」

秋子「そうかねえ」

ワタシ「・・・いっそたくさん絵でも描けば良いのに。学校の時描いてた絵、面白かったやん。こないだ入院中に描いてたほんわかした絵とか、なんかムリしとるみたいでさ、前学校で描いてたような重たい絵の方が面白いし描いたらすっきりせんかいな」

秋子「たぶん絵を描く体力もないんやろ」

ワタシ「そっか・・・」

(ワタシ・秋子、沈黙)

〈1日目-7〉

〈ワタシ・秋子。ドトールで喋り続けている〉

ワタシ「しかしスッゲー人」

秋子「お盆だったから」

ワタシ「爆竹祭り。見たかったな」

秋子「別に見ても、うるさいだけ」

ワタシ「道にたくさん残骸が落ちてたんだけ見た。秋ちゃんは見た？」

秋子「うんにゃ、ウチも実家帰ってたし」

ワタシ「爆竹せんの？」

秋子「せんね」

ワタシ「秋ちゃん実家帰るとさ、ツイッターお兄ちゃんの事ばかりやね」

秋子「他にする事ないし。兄ちゃんか母さんの事くらいしか呟けんし」

ワタシ「そうなん？」

秋子「ばあちゃんち行くと、ばあちゃんが重箱の隅つつくみたく母さん苛めるし、母さんは優しいけんなんも言わんし、父さんは見て見ぬふりやし、兄ちゃんは大人げなくて自己中やし」

ワタシ「おばあちゃんって、お父さんのお母さんってこと？」

秋子「うん。たまに父さんがばあちゃんに怒るけど、それも母さんの事心配してなんやなくて、単純に、ばあちゃんが気に障るけん怒る、見たいな感じなん。タバコやめろって言うのをさ、相手の健康を気遣って言うのか、単純にタバコの煙がイヤやから言ってるんかのちがいで、わかるかいな」

ワタシ「言わんとする事はわかる」

秋子「タバコって、ストレス解消に吸うやんか、それをやめろって言ったら、ストレスになるやんか、かえって病気になるかもしれんやん。そこまで考えた上でやめろって言うなら良いよ。でも「ガンになるけん、やめり」って相手のため見たく言っても、本当は単に自分が煙臭いけん「吸うな」とかさ、それでやめたら、吸えなくなった人はストレス溜まるやん。そこに気づかないような無神経さ。すっごい嫌なん」

ワタシ「はあ、なるほどね」

秋子「呟けんやろ、父さんが切れたとか母さんがばあちゃんにいびられるとか」

ワタシ「確かにね」

秋子「そしたら、母さんとの会話か、兄ちゃんを観察するかのどっちかなん」

ワタシ「ウチんちはお母さんとお母さんのお母さんが仲悪いよ」

秋子「お母さんと、その実のお母さんが？」

ワタシ「うん。なんか、やる事なす事全部潰されたって。だから母方のばあちゃんち行くときは、みんなで、「どうやってさっさと切り上げて帰るか」って相談してる」

秋子「ははは」

(ワタシ・秋子、沈黙)

〈1日目-8〉

〈ワタシ・秋子、ドトールで会話を続けている〉

秋子「考え方が正反対の後輩が居てさ」

ワタシ「ふん」

秋子「一緒に何か出来たらって思うんやけど、話がなかなか通じんで進まんの。うちは話すの苦手やし、向こうは言葉を使うんはすごい上手なんやけど、後輩やからって遠慮してあんまりたくさん喋ってこんけん、うまく意思疎通が出来んっていうか、わかってるつもりで話していたらわかってなかったとかで」

ワタシ「秋ちゃんの話してる事はわかるけどなあ」

秋子「それはウチとトミがまだ少し同じような部分があるけん。でも後輩は本当に真逆な感じ、やけん、一緒になんか作ったら、なんか今までと違う事が出来たり、わかったりせんかなって思ってる」

ワタシ「それはもう、努力して話続けるしかないっちゃんない」

秋子「うん・・・」

ワタシ「めんどくさかったら、1人でするしかないよ。1人で描き続けるしかないっちゃんない」

秋子「うん、そうなんよね・・・トミはもどかしくないと、その辺、演劇って」

ワタシ「あー、もどかしい時はあるけど、それ以上に面白いよね、ワタシが考えつかん事を考えつくけんさ」

秋子「それってでも自分の思い通りにならんでイヤやない？」

ワタシ「まあね、でもそれ以上に面白いかな、ワタシ的には」

(ワタシ・秋子、沈黙)

〈1日目-9〉

〈ワタシ・秋子、ドトールで会話を続けている〉

秋子「・・・なんで努力せんのかなって思うよね。トミも」

ワタシ「努力？」

秋子「うまく描けんかったらうまく描けるように技術的に勉強するとか」

ワタシ「話飛んだ。そっちか」

秋子「あ、うん、飛ばした」

ワタシ「うーん、でも絵は技術的な事考えて描いてた時より、好き勝手描いてる今の方がなんかしっくり来るんよね。やけん、あんまり技術とかもう興味ないかも」

秋子「絵に限らず」

ワタシ「まあ、ね、演劇は、まあまだまだやし勉強中やけど」

秋子「トミはしてるつもりかもしれんし、ウチが知らんだけかもやけど、全然努力しとらんみたいに見える」

ワタシ「そう・・・ごめん」

秋子「謝る事やないやろ」

ワタシ「まあ、うん。でも」

秋子「いや、こっちも、すまん」

ワタシ「あーもーヤダ。メンドクサイ」

秋子「何いきなり」

ワタシ「めんどくさくない？色々」

秋子「めんどくさいね。トミが」

ワタシ「君もめんどくさいよ」

秋子「うん、知ってる」

ワタシ「ぼちぼち行くわ」

秋子「そう」

ワタシ「うん。ありがとう」

秋子「うん」

ワタシ「また、そのうち」

秋子「うん。そのうち」

(ドトールを出て、ワタシ、秋子と別れる)

ワタシ「秋ちゃんは頭がいいと思う。頭が良いというか、鋭いというか、すごく醒めている。だから、客観的な事柄を客観的にとらえて分析する力があって、なんでも「感情」基準で判断しがちな自分では気づかないポイントを教えてくれる。その割に秋ちゃん自身の事は全然客観的に見れてなくて、本人にそんな事言ったら絶対嫌な顔して「ムカツク」って言われるから、言わないけど、ともかく自分の事は醒めてるつもりで全然分析できてなくて、やけん秋ちゃんのこと面白いし好きだ」